

日本の俘虜はソ連
でどんな生活をしたか

竹内 錦司

— 画 信 —

日本の俘虜は ソ連でどんな生活をしたか



竹 内 錦 司

昭和二十五年五月十五日 印刷
昭和二十五年五月二十五日 初版発行

日本の俘虜はソ連で
どんな生活をしたか



著者

竹内 錦司（たけうち きんじ）

発行者

神吉 晴夫（かみきち はるお）

印刷者

山元 正宜（やまもと しょうき）

印刷所

三見印刷株式会社
東京都文京区柳町二六

定價 百三十圓 発行所

株式
会社

光
文
社

東京都文京区音羽町三ノ一九
電話九段(33)一三一―九番
振替口座東京一一五三四七番

あいさつ

私は専門の漫画家でもなければ文章家でもありませんが、ソ連に抑留^{よくりゅう}された人々は、一体どんな仕事をどのようにして來たのでしょうか。帰られた方々からいろいろと話を聞いたり、その方々の体験^{たいけん}をつづつた本も出てはありますが、読んだり聞いたりしたのでは百聞は一見にしかずの百聞であつて、一見を望みたいところであります。そうした意味から筆をとつたのが、つたないこの一冊なのです。

が、私とて、抑留^{よくりゅう}中に、「日本へ歸つたら、一つソ連の様子を絵に描^かいて、みんなに知らせてやろう。」なぞという氣持があつたわけではありません。ただ多少なりとも國民の皆様に、特に未だ歸らざる留守家族^{ちうす}の方々にお知らせしてあげたいとの一念から、急にこんなことを思いついたのです。何しろ参考品一つあるわけがなく、まったく凡知な一個人の記憶^{きおく}にのみよつて描いたのですから、すでに歸られた方達から見れば、すいぶんと間違^{まちが}いもあるかも知れませ

ん。風景や建物は、特に記憶が悪く、どうして描いたらいいかと苦
勞しました。そのためすいふんと見にくい点もあるうかと思われま
すが、素人のことゆえカンベンしてください。

なお、私のこの虜行記は、シベリヤの奥地で苦勞された人達とく
らべれば非常にめぐまれたものだつたので、この点もあわせてよろ
しくお察し願いたいと存じます。

一九五〇年

春たけなわの時

元兵長、ソ連俘虜

竹内錦司

シベリヤ横斷……………(七)

ラーダ收容所……………(三一)

コルホーズ(農場)……………(九)

車輛工場……………(一五)

タンボフストロイ(土建)……………(一五)

伐採……………(一七)

マルシヤンスク收容所……………(二〇)

再びシベリヤ横斷……………(二三)

再びシベリヤ横斷……………(二三)

著者紹介

タムウチキン
竹内錦司

大正十二年八月生まれ。

昭和十四年三月静岡縣青島尋常高等小学校卒。

昭和十五年新愛知新聞社（現中部日本新聞社）静岡支局勤務。

昭和十七年三月静岡市私立晁陽中学夜間部中退。

昭和十七年中華民國華北交通株式會社入社。

昭和十八年四月入營。

昭和二十年八月滿洲にてソ軍と戦闘、俘虜となり十一月入ソ、ラーダ、タンボフ、マルシヤンスクを経て、昭和二十二年十一月復員す。

昭和二十三年静岡美術漆器補導所卒。

現職 静岡市久保田看板店勤務。

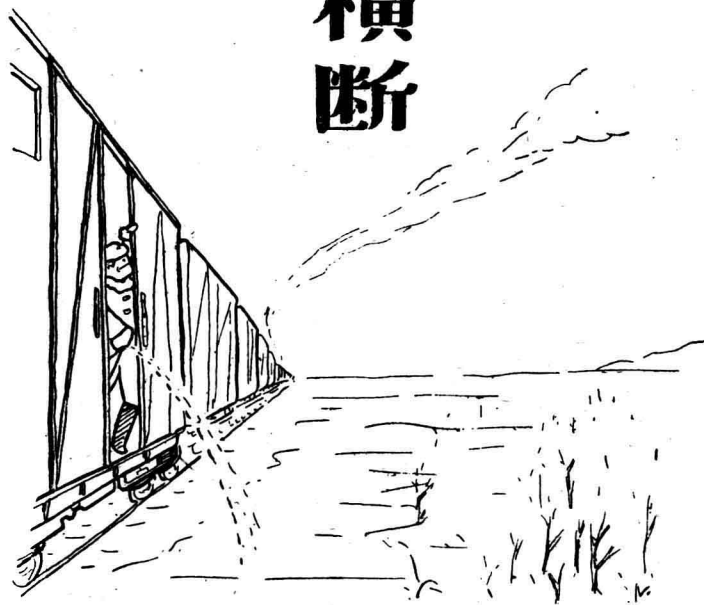
住所 静岡縣志太郡青島町前島一丁目四八八ノ二

信 畫

日本の俘虜はソ連で
どんな生活をしたか

竹内錦司

横断



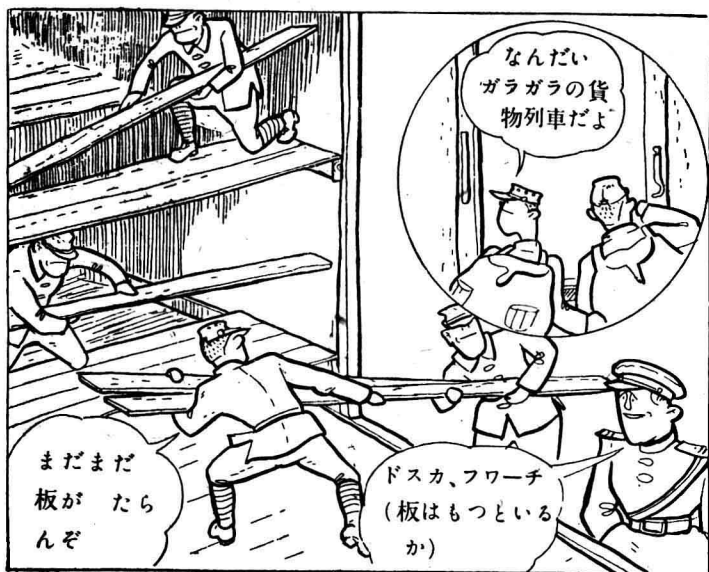


「東京城、寧安、さらに牡丹江と、終戦後
轉々として收容所を廻つた私達は、いよいよ
待望のダモイ（帰國）に心も浮き浮き、
駅に向つたのです。それより先、すでに幾
つかの大隊（約千名單位）が私達の牡丹江
收容所から出て行つておりました。」

「シベリヤ行きだろう。」

「いやもう戦争は終つたんだから当然内地
に歸すのさ。」などと流言が乱れ飛び、一
喜一憂させました。でもすでに乗車のきま
つた今、シベリヤへ作業に行くのだ、なぞ
と考へたくはない。皆なつかしい祖國を夢
みていたのです。

私達の大隊は特別大隊で、その全部が旧
關軍の將校千名で、三十名の下士官兵が
當番要員として、行を共にすることになつ
た。私もその下士官兵中の一人として、昭
和二十年十一月三日、何カ月か住みにしこ
の牡丹江收容所を後に駅に向つたのです。



駅に着いて驚いたのは、普通の客車と思いに、それは、なんと貨物列車だった。むろん何の設備も準備もされてはおりません。ソ連側の指図で倉庫から板を運び、二段装置に貨車を整備するやら、ドラム罐を給水用に取付けるやら、そしてまた、ストープまで取付けよとのこと――

心あるものならば、ここで、「こりやアおかしい、ウラジオまでの旬日の旅行に、今の氣候ならまだストープはなくてもがまんのできぬ寒さではないはず。」と疑ったでしょうが……。私達は日本人らしい、人のいい考え方で、「これはソ連が、私達に好感を持たせるためのサービスだろう。」などと喜んでいたのです。

準備が大方ととのえば、今まで何べんとなくくりかえされた携行品の検査があり、地図類、国旗、刃物等一切取り上げられました。



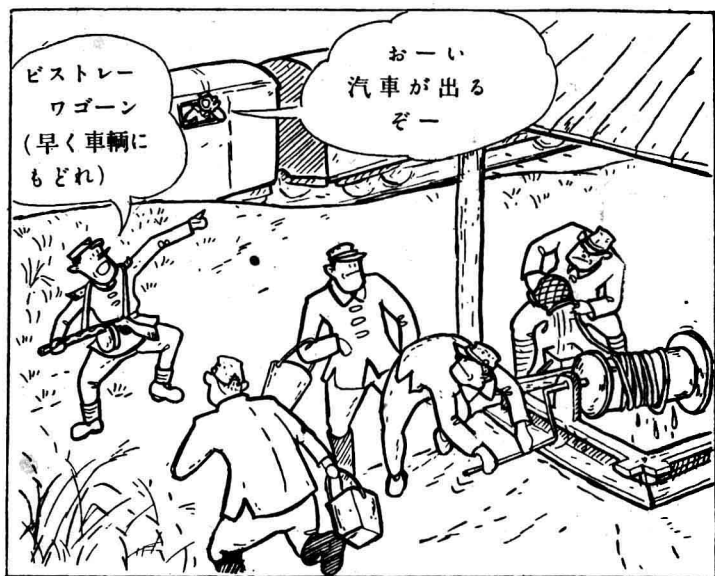
一日、二日、三日。駅に着いてから、もう今日で一週間あまり。出発が遅いので、皆少々たいくつしてきた頃です。

その間の食事は皆でんでに、貨車のまわりで二人、三人と組になつて、毎日受領する糧秣^{りようまつ}（米、麦、粟^{あわ}、高粱^{ゴウリヤン}、小麦粉等）を炊飯^{すいはん}してすごしておりました。なお、その他に黒パン（その頃の黒パンはフスマが非常に多くまじつていたので、口の中がトゲトゲして、とても食べられず、うすく切つてカリカリに焼いて食べたものです。称してフスマパン。）や、調味料^{ちようりよう}に油や塩や干魚、塩肉等も上りました。

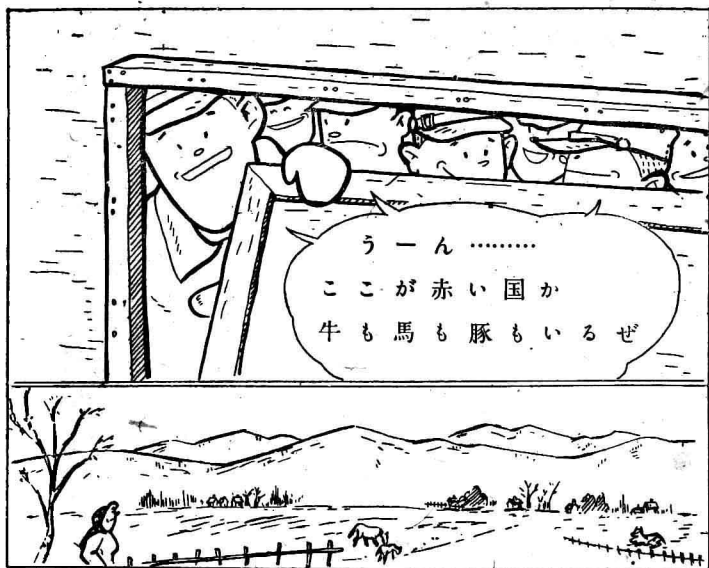
そのうちに、私達の梯團^{ていだん}には糧秣^{りようまつ}が二貨車（約二カ月分）も連結されているとの報が伝えられたのですが、私達はマダマダおめでたい考えを持つていたのです。「ウラジオで船を待つ間の予備糧秣^{よびりようまつ}であろう。」と。



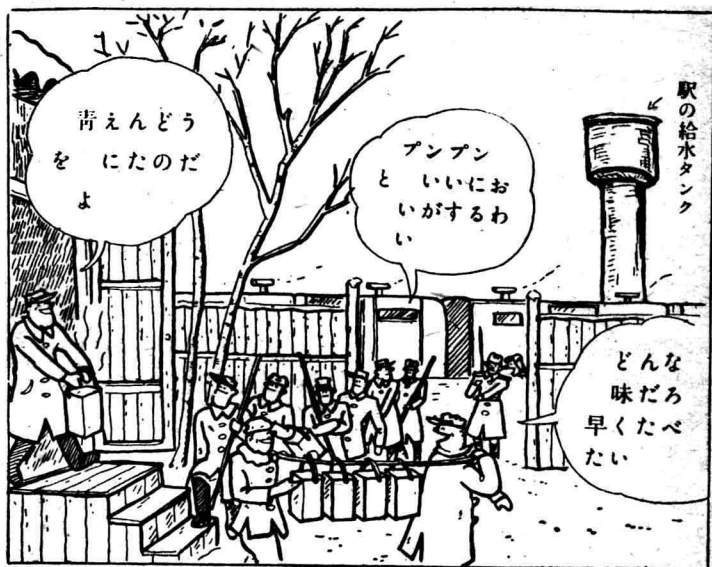
牡丹江の駅で、発車を心待ちにしていた
 或る夕方。すっかり酔つたソ連の下士官
 が、大きな声で訳のわからぬ氣焰をあげな
 がら、いいゴキゲンで、ふらふらふら、千
 鳥足で私達の車輛にやつてまいりました。
 それをどこで見ていたのか一人のソ連將
 校が飛んで来て、いきなりその酔つばらい
 を打つ、ける、なぐる。片方はぐでんぐで
 んですから、抵抗はほとんどできず、苦し
 そりに鼻血を出して、ぐつたりと地に伸び
 てしまった。その酔漢のえり首をつかんだ
 かの將校は、ズルズル引きずつて駅の方に
 連れ去りました。
 俘虜の面前でこんな醜態をみせ、ソ連の
 軍紀を紊乱したとでもいうのでしょうか。
 そこを通りがかりのゲーペーウの政治部員
 に運悪く見つかつての結果であつたので
 しよう。その仕打のひどさに、私達は皆目
 の色をかえて見ておりました。



いよいよ出発。住みなれた牡丹江よ、満州の地よと、二段装置の貨車の中で、ガタガタはげしくゆすぶられながら、窓の景色のうつりかわりをなつかしんだものです。半日、一日、列車は南下。牡丹江で満水したドラム罐も大員数（大貨車約八十名、小貨車約四十名）では、そういつまでもありません。列車が停るごとに、交代で、水を探しに出かけるのですが、いつ出発かサッパリわからないので、遠い所へは行けません。こんな小さな駅に思うところで、二時間も三時間も止まってみたり、かなり大きな駅だからと油断して、ちよつと遠くまで出かけていると、ものの一分もせぬまでに発車です。あわてて、水いっぱいのバケツをほつぽりだして駆けつけたが、それでも自分の貨車まで追いつけず、最後尾にやつとつかまつた、なんてことも、たびたびありました。



いつか、初年兵の頃来たことのあるこの駅は、たしかソ満國境の街、綏芬河の駅。
 いよいよ入ソです。鉄のカーテンに固くとざされた共産主義の國ソビエツト。窓の外も眺めてはいけないという達しでした。見るなど言われれば、なお見たくなるのが人情の常、ましてや、今まで世界からひとり分離していた赤色ソビエツトです。
 それだけに、わずかのすきまから外をのぞいて見るのでした。
 だが、そこに見られた風景は……。
 恐ろしい人でもなく、またこわい人でもなく、一見赤だか白だか、見たところは少しもかわらぬ「ただの人達」だったのです。
 そして、野には牛も遊んでおれば、豚も勢いよくはねておりました。



國境の街を過ぎて二三日、そろそろウラ
ジオに着く頃だと思つていたのに、列車は
なんと北へ北へと進んでいたので。
窓の外も眺められるようになったある
日、かなり大きな街の駅で、突然ソ連側か
らの兵站給與^{へいたきやう}があり、青豆のカーシヤ^{かあしや}（塩
で味つけて煮たもの）と黒パン（さすがに
黒パンの本場。フスマはありません）が上
りました。

その時、ホーム附近にいた地方人を見か
けましたが、案外落ちついて私達を眺めて
おります。驚いたのは彼等が片言の日本語
を知っていることで、通訳^{つうやく}に聞いてもらつ
たところ、すでに九月頃から毎日のよう
に、奥地へヤボンスキー（日本人）が送ら
れているとのこと。そのために、彼等が日
本語を一言二言知つていたのです。

いよいよシベリヤ行きは確定^{かくてい}。祖國^{そこく}は祖
國でも、とんでもないソ國だつたのです。